遠方からの手紙

☎（044）522－1369

1979年4月15日発行

松本礼二事務所　川崎支所
〒210 川崎市幸区河原町3－218

三里塚・千葉動労そして「本山」

それは80年代革命の現実性のあかしだ

1979年4月15日

共産主義者同盟 政治局

三里塚・動労千葉そして本山

この大平楽の世の中で、現在、革命派が看過してはならない三つの出来事が進行している。三里塚、動労千葉地本そして全金本山をめぐる闘いである。これら三つの闘いの現段階は、それぞれに共通する本質を明確に露呈しており、それはたんに「過激派」の三つの拠点という共通性なのではない。しかしにもかかわらず、それぞれの闘いにかかわる者たちが、三者に共通する本質にはっきりと気づいてはいないところに、闘いの主体の側の危機もまた露呈しているのである。それぞれの闘いはいま、まさに「明日の戦術」を要求されているが、戦術の正しい提起も、共通の本質を誤りなく確認することからしかなしえない。

地域権力としての三里塚同盟

三里塚闘争が、全国の急進派の大連合による闘いであるという局面は、現在明らかに過去のものとなっている。大部分のグループが、ただ三里塚反対同盟の闘いに乗っかっているにすぎない現状は、いまは問わない。ともかく開港できて1年たったということで、三里塚問題が政局の争点という認識は、政府の側から急速に遠のきつつある。去る3・26一周年集会も、事情を変えるものでなかったことは明らかだが、もっと本質的なことは、二期工事の完成も含めて、空港を計画どおりの国際空港にするという意向を、政府・体制の側が事実上投げてしまっているということにある。過去13年の三里塚農民の抵抗が、国家権力をそこまで追

いつめたのである。

では本当の意味で三里塚闘争は終ったのか――そうではない。空港建設をめぐる政府の意向がどうあろうと、また急進派大連合の「支援」の実情がどうであろうとも、13年の不屈の闘いの結果として、三里塚反対同盟の力量と権威だけは厳として存在している。騒音問題等、欠陥空港が周辺地域にもたらした矛盾は、日々顕在化しつつあり、そのなかで同盟の権威は周辺一帯に拡大しつつある。地域の正当な権力として、同盟は事実上根を下しているのである。

だからこそ、二期工事の再開などの政府側の攻撃は、再び13年の闘いを結果するしかないであろうし、国家権力が認識せざるをえないのもこの点である。そればかりではない。北総台地を含めた空港一帯の「地域開発」計画が、三里塚闘争で大はばに崩れている現状をも政府は知っている。

成田地域は、東京近郊としては目だって「開発」が遅れている。むろんいわゆる農業開発ではなく、またコンビナート地域としてでもない。コンビナートが物を作りすぎ、農業が金を食いすぎることが騒しく論議されている「安定成長」の時代である。この地域は、安定成長時代の成長産業ともくされる、住宅・レジャー産業および防衛治安基地建設のために、その開発がねらわれているのだ。新しい時代の国家的プロジェクトとしてである。国際空港として役だたないことがはっきりした成田空港は、新たな「軍事空港」　国内むけ治安空港として、以上の開発計画のなかで位置づけなおされる可能性も高いのである。

だとすればこうした国家的プロジェクトによる地域開発にとって、闘う住民の地域権力の確立がどんなに妨害要因となるかはいわずと明らかなことだ。「列島改造」のプロジェクトにたいして、三里塚をはじめとした地域住民闘争が、決定的な反対要因となったことを想起するまでもあるまい。

それゆえ、過去の「三里塚闘争」が終ったいま、三里塚反対同盟は、真実一つの地域権力として自己を確立し、この権力を北総一帯に拡大すべき位置にたたされている。だからこそ、政府側に二期工事再開を正式に断念させ、したがって国際空港の「廃港」のプログラムをはっきり軌道にのせることが、地域権力確立へむけて同盟がどうしても突破せざるをえない今日の課題なのである。

農民権力としての三里塚同盟

地域権力としての三里塚反対同盟がもつ、基本的な特徴は、それが農民の権力だということである。今年は「農政の年」だといわれる。政府・財界・労組・農協　-まさに文字通りにこの国の全体制が、口をそろえて、産業としての農業の征伐を唱えはじめた。農業と農民は、そのイデオロギーのいかんにかかわらず、資本と巨大労組の複合体制にとって「反体制」の側に追いやられている。階級的「強者」としての工業資本のブロックにたいして、階級的弱者としての農民の位置が、いやおうなくクローズアップされているのである。

したがって、全国の農民にとって三里塚闘争とは、階級的弱者として征伐の渕にたたされている農民が、国家権力としぶとく闘って勝てるという実例である。「過激派ゲリラ」としてではなく、また一部のふやけた論者がいうような、「土の闘い」とか「地方の時代」とかの実例なのではないのだ。だから、地域農民権力としての反対同盟は、これまでの左翼芸能界や進歩派への影響力とはまったく別の権威を、いま事実上、全国の農民に行使していることに気づかねばならない。全国農民の知られざる注視のなかで、いまやまったく新たな「三里塚闘争」がはじまっているのである。

二期工事断念をかちとったあかつきには、ただちにいわゆる「農業振興策」を手だまにとる仕事が、三里塚反対同盟に課せられるであろう。現在予算計画上の机上の空論にすぎない政府側の農振策を、農民側が換骨奪胎するためには、同盟が地域住民全般と自治体にたいして決定的影響力を行使できなくてはならない。また、知恵を集めて、産業としての農業の自立のための策を提示しなければならない。そのときこそは、破滅の渕にたたされている全国農民の、総決起のときとなるはずである。

工業資本ブロックによる農業の征伐戦は、地域農民権力としての三里塚闘争の階級的性格を、一挙に明らかにしつつある。この点こそは、70年前後の「地域住民運動」が、ついに獲得することのできなかったところである。地域の民衆の権力は、弱者の階級形成の機関であることによって、はじめて一つの政治権力として確立しうることを、三里塚闘争は実証しているのだ。

「労農同盟」の内実

去る3月30日、動労中央委員会は、千葉地本の除名、権利停止を決定し、地本は現執行部体制による独立組織結成を宣言した。

両者の対立が、ほかならぬ三里塚闘争の支援をめぐって表面化し、ついにいきつくところにいきついたことは、きわめて特徴的なことだ。だがこのことは、三里塚闘争をめぐる動労内セクト間の内ゲバを意味するものでもなければ、中核派や戸村一作がいうような「労農同盟」の問題なのでもない。階級的弱者の地域権力という今日の三里塚闘争の階級的性格こそが、逆に、両者の対立の性格を根本的に規定しているのだ。この点を認識しえないところに、現在の中核派――千葉動労の弱点がある。

協会派・カクマル派の結託した動労中央のマルクススターリニストたちは、まさにこの点に、本能的に気づいている。対立が内ゲバや過激派や労動組合の統制の問題ではなく、今日の巨大労組が農民をはじめとした弱者と「連帯」などしえないことを、彼らはよく知っているのである。食い逃げ労組の全国センター総評がとなえる「弱者救済」「国民春闘」「労農同盟」などが、実際なにを意味しているかを、白日のもとにさらしたのが、両者の対立の本質である。それゆえ、これら食い逃げ労組の階級的同盟にたいして、「本当の労農同盟」を唱えることは、なんら本質的な対立とはなりえない。昔なつかしい左翼反対派の裏切り論を出ることはできないのだ。両者の対立は、くりかえすが、左翼反対派の図式でとらえることはできない。

だから、今回、動労中央の処分攻撃のなかで、千葉動労が団結を固め独立組織を宣言したことは、巨大な前進である。千葉動労・中核派は、これまで動労組織のうちで守られてきたみずからの「階級的利害」を犠牲にしてまで、階級的弱者と連帯することを決意したのである。すべての革命的行動というのは、例外なしにこのような犠牲を強いる。組織のたえまない前進や、みずからの待遇改善の積み上げのうえに革命をでっちあげるマルクス・スターリニストたちが、革命とは本来無縁なのもこのためだ。千葉動労は、期せずして、今日の巨大食い逃げ労組に敵対し、食い逃げ利益を犠牲にするしか、弱者の闘い、革命に連帯しえないことを示したのであり、この点にこそ、「労農同盟」の内実がある。

地域権力としての千葉動労

だから、われわれは、千葉動労の決意を無責任に礼賛したりはしない。

第一に、千葉動労は、新しい一つの労組としてだけではなく、なによりも地域の政治的権力として独立したのだと指摘しなければならない。中核派が、労働組合のルールとして独立組織結成をとらえることは、結局は組織のジリ貧と自滅につながる。なぜなら、事実、千葉動労は一つの権力闘争を中央と闘い、一つの権力機関として独立したからだ。そしてくりかえすが、この権力機関の性格は、マルクス・スターリニストの組合官僚に敵対して、階級的弱者の立場にたつものだからだ。労働組合が組合として、あるいはもっとはっきりいえば、労働者階級が階級として革命的だなどという誤った認識を、千葉動労はみずから捨てる道に一歩踏みだしたのだ。

それゆえ、千葉動労は、まさに千葉における一つの地域権力としてみずからをうち固めることによってこそ、同じ地域のもう一つの地域権力、三里塚反対同盟とがっちりと連帯することができる。工業資本と巨大労組とが結託した階級ブロックにたいする、弱者プロレタリアートの階級的同盟が、かくしてこそつくりあげられるのだ。

この点で、千葉動労のさし迫った課題は、成田空港への燃料輸送阻止を闘い切ることである。スローガンとして三里塚との連帯や燃料輸送阻止を唱えることや、カンパニアへの動員を争うことなら、巨大労組内の左翼反対派としてでもすることはできる。だが実際に燃料輸送にダメージを与え、3年という契約期限を実行不可能にし、かくて成田国際空港の将来を決定的にうちこわす闘いは、そんなことでできないことは、諸君らがよく知っている。地域の輸送の生殺与奪の権を握っている労働者が、まさに革命的階級として行動するときにだけ、燃料輸送阻止は現実のものとなる。そして、千葉動労は、いままさに、かようなプロレタリアの権力機関として、動労中央から独立したのである。三里塚の農民のみならず全国の弱者プロレタリアが、食い逃げ労組に叛旗をひるがえした諸君らこそ、本当の「労農同盟」の実を示すものと期待している。

世の左翼反対派大連合の唱える労農同盟は、総評のそれとまったく同様、組織労働者の階級利害のために農民を動員するものでしかない。労働者は、千葉動労

のように、みずからをプロレタリアの権力機関としてうち固める闘いを抜きにしては、労農同盟は絶対に不可である。工業資本とブロックを組んで、食い逃げ利益に安住したままで、なんの労農同盟か、弱者救済か。

労働者権力としての千葉動労

第二の課題は、「労働組合」としての千葉動労の闘いに関してである。

動労中央との組合組織をかけた闘いがいま始まっている。中央の方針は、たんにダラカンや反革命セクトだけでなく、貧しい「強者」の特権に安住している大多数の動労組合員に支持されていることを忘れてはならない。諸君は判官びいきにたよって敗北することはできない。組合の闘いとしても、果敢に打って出ることが要請されている。

千葉地本の堅い団結のもとでは、動労中央がいますぐ組合大会のでっちあげ、組合の再登録、組合事務所の奪取にでることはできない。また、千葉国鉄当局との団交権も確保しえている。だからこの有利な時期に、闘う動力車労働者の全国的な組織結合へむけて一歩を踏みだすことだ。たんなる千葉動労ではなく、全国の指導部として、全国の団交権を当局に要求する闘いを組まねばならない。組織的独立の機が熟していない地本では、現動労との二重加盟方式でもよい。このようにして、千葉動労のごとく、動労中央から独立し、それぞれがその地域で、地域の一つの権力機関として自立し、かかる諸組織の全国的連合として、千葉動労は飛躍しなければならない。

千葉動労の闘いは、それを労働運動とみるときには、反戦青年委員会運動以降の新左翼労働運動の、決定的な帰結を意味している。分裂派少数労組と総称されてきたように、長船第三組合をはじめとして、闘う労働者はいやおうなく、総評・同盟を問わぬ食い逃げ労組との組織的決別を強いられてきたのである。そして、それぞれの分裂少数派組合は、なによりもみずからが生産現場に根ざした地域の権力として自立し、その地域の革命派とともに地域全体にしっかりした権力を行使するようになることが、革命派労働者の全国結合にとっても、不可欠の前提であることがはっきりしてきたのだ。一企業の反対派労組から地域の弱者プロレタリアの労組へ――これを、われわれは広い意味で「地域合同労組」と呼ぶのである。分裂少数派労組は、地域合同労組として飛躍する以外に力を伸しえない。これが、全労活が左翼大連合派に私物化され有名無実となってしまった現状――反戦青年委以降の革命派労働運動の歴史にたいする、われわれの総括である。

労働組合運動としての千葉動労の独立は、右の意味で、まさに革命派労働運動の革命的な帰結としてあるのだ。長船第三組合結成に比類し得る第二の決定的な飛躍を、千葉動労は革命派労働運動の歴史に画さねばならない。このためにこそ、動労千葉は、全国の闘う動労労働者に檄をとばし、各地の組織は地域プロレタリアとの合同労組形成として、その権力を地域に固めねばならない。そしてその地域の全革命派に団結を要求するのだ。千葉動労と三里塚反対同盟とのスクラムは、まさに革命的実例ではないか。両者の「労農同盟」の将来は、全国各地の労農同盟、すなわち地域弱者プロレタリアの、工業資本ブロックにたいする階級同盟の、カガミとなっていくであろう。

「本山」の同質性

ところで最後に、全金本山支部の闘いが、以上の意味で動労千葉と正確に同じ地平にあることは、もはや多言を要しない。同じく中央・地本本部から、統制処分と組合つぶしの攻撃をかけられているというだけではない。本山8年間の闘いが、今日の革命派のあり方を根本的に問う地点にまで到達している点で、動労千葉、そして三里塚反対同盟といまや一線にならんでいるのである。

本山支援に群がってきた左翼反対派連合が、現在一せいに事実上の逃亡を開始したことは、右の事態をよく物語っている。なぜなら、これまでのように、事はたんに戦術問題をめぐる選択にあるのではないからだ。既成の労働組合の全国センター、さらに労働組合というもののあり方自体が、いま問われているからだ。そして、既成の組合の敵対のなかで闘ってきた、反戦以来の労働運動の歴史的総括が、いまつきつけられているからだ。労働者階級は労働者階級であるから革命的だというドグマを捨てきれず、現実には既成幹部にたいする左翼反対派の位置に甘んじ、これからもそのように生きたいと願っている四トロや青解等の諸派が、この時点で戦線を逃亡するのは当然であり、かつ歓迎すべきことなのである。

現在本山支部の闘いの前進は、地本の分裂攻撃のなかで、独立の本山労組として組織自立をかちとれるか否かにかかっている。これは同時に、本山支部として

のこれまでの団結を、左派の革命的イニシアチブで再編することによってしかなしえないことも明白である。いいかえれば、これまで主として巨大労組内の「分裂少数派第三組合」の位置に、本山労組もまた立つことをいま強制されている。そのことなしに、争議の勝利もない。

だからこそ、本山支部の現在には、分裂少数派組合運動の全歴史が凝縮している。かつてのように、組合の視点と新左翼の観点を器用に使いわける第三組合運動は、もはや本山には許されていない。

本山労組の独立は、ただちに仙台という地域のプロレタリアの権力機関化を要求される。千葉動労と全く同じように、従来の支援組織の再編をかけて、仙台そして全国の連携をかちとらねばならない。広い意味での地域合同労組の路線は、中小を中心とした全金労働者のとらざるをえない団結形態なのだ。資本と労組のブロック体制のしめつけが厳しくなっているこの安定成長時代に、全金中央といえども、弱者プロレタリア労働者の利害を守り切ることはできない。プロレタリアの求める団結形態が組合という形をはみでる事態は、全国各地で現実のものとなっていることは、南大阪の経験をみてもはっきりしていよう。

「あたりまえの労働運動」を貫徹してきた本山支部は、いまもあたりまえの労組として争議に勝利しなければならない。全金地本のねらいは、本山支部の左派を放逐したうえで、中労委裁決の線で争議を収拾することにある。だが、本山労組が労組として健在なかぎり、この「分裂」という事態のまえでは、中労委裁決待ちの体制は、いま事実上崩壊してしまっているのだ。本山労組にとっては、まさに「あたりまえの組合運動」のふりだしにもどったのだ。しかもいまや、このことは左派のヘゲモニーによる本山労組の独立をもってしか、勝利的に貫徹することはできない。本山支部の分裂をかけることをせず左派が自滅することを前提に、すでに全金仙台地本の争議敗北のレールはしかれているのだから。本山組合の独立、職場奪還、それしか勝利のための選択はない。

中核派の奮起を！

本山支部に指導的影響力をもっている中核派が、ここでなお態度をあいまいにしていることは、全くのところ悲しむべき事態である。千葉でみずからが選択したのと同一の決断を本山でしえないことは、ひいては中核派の千葉動労の指導にひびいてこざるをえない。ここでも選択は一つしかない。千葉動労、三里塚反対同盟そして本山労組がいま一つの階級的同盟へむけてスタートしていることを強く認識し、あらゆる左翼反対派根性を捨てて、革命の大道に復帰することを望む。いまこそ、資本の手先にすぎないカクマル派との不毛な「内ゲバ」を捨て、革命の大衆的「外ゲバ」の戦線に復帰せよ。そのことによって、諸君らはカクマルせん滅戦にも「勝利」するのだ。

左翼反対派の没落と新しい〈革命〉の時代

ベトナムのカンボジア侵攻、越中戦争そして中国による中ソ同盟条約の破棄という一連の出来事は、戦後体制が全世界的に終りを告げていることを、ダメ押し的に確認してみせた。ちょうど、保守と革新、反動と民主の戦後国内体制に対応して、戦後世界体制は「二つの体制」――資本主義体制と社会主義体制――の競合共存としてとらえられてきた。今回の「社会主義体制」内部の内ゲバは、これまでの中ソ対立などとちがって本質的に「外ゲバ」であることを、全世界にさらけだしたのである。

だから、革新とか労働者階級とかいっても何の意味もないように、いま、「社会主義」的言辞はなにものも意味しはしない。いや、戦後体制の終りを早すぎて確認することから出発した新左翼20年の歴史は、右のことを骨のズイまで認識し、新しい革命の道を思想的にも実践的にも獲得することに、たっぷりと時間をかけてきたのではなかったのか。

三里塚、千葉動労そして本山労組の闘いの現在こそは、革命が、体制間矛盾やイデオロギーの問題ではなく、大衆的な暴力と大衆権力への志向であることを、誰の目にもはっきりさせている。新左翼左翼反対派のように「既成」にたいする「影」の存在ではなく、大手をふって革命の大衆的暴力から出発する時代が始まっているのだ。大衆の革命的暴力を擁護するという唯一点で、すべての日和見主義諸セクトとそのイデオロギーと、死活の党派闘争をかまえる時代が始まっている。

三里塚、動労千葉そして本山労組の闘いを、階級的弱者大衆の同盟として、一線にそろえるところから、新たな出発をともにかちとろう。